

当施設における 通所リハビリ訪問指導等加算の取り組み ～入浴動作の実用性向上を目指した一例を通して～

医療法人 稲門会

介護老人保健施設フェアウインドきの

○ 療養部 作業療法士 小松 顕

はじめに

- 準寝たきり状態の利用者がリハビリと入浴を目的にデイケア利用となった
- 利用から3週間、居宅を訪問し「利用者の真のニーズ(自宅での入浴)」を把握することができた
- 入浴動作の実用性向上に向け、施設で動作練習を行うが変化は乏しく、居宅訪問指導を行うことで、結果実用性が向上した
- 当施設における訪問指導での気づきと課題について報告する

ケース紹介

- 80代女性 要介護1(初回認定)
- 借家1階にて独居 キーパーソン:姪
- 心不全増悪により約3ヶ月間入院、
退院後にデイケア利用
- 退院直後 FIM(機能的自立度評価法):107点
外出頻度が少なく、日中も寝たり起きたりの生活
- 主訴:元気に歩けるようになりたい

初回リハビリテーション計画

- 目標 歩行動作能力の向上
- 身体機能評価
 - 関節可動域:良好 粗大筋力 :3+~4
 - 浮腫:軽度
 - 歩行:シルバーカー見守り 約30m程度
- リハビリテーションプログラム
 - ①歩行練習 ②関節可動域練習 ③筋力練習

居宅訪問指導

- 住環境評価
 - 物があふれて掃除が困難
 - 浴室はもの置き
- 真のニーズ「自宅での入浴」に気づく

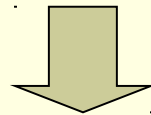


- リハビリテーション計画の見直し
 - 目標＝入浴動作の実用性向上
 - リハビリプログラム＝またぎ動作練習
 - 立ち上がり動作練習



担当者会議（多職種との協働）

- 参加者：ケアマネジャー、訪問介護事業所、
施設相談員、福祉用具業者、作業療法士
- 課題：浴槽高60cm、住宅改修不可、動作困難



入浴動作の実用性向上にむけ、
月に1度訪問指導等加算の方向性へ

経過報告

■ 2回目の訪問指導

- ・福祉用具業者との連携
- ・入浴動作評価
- ・福祉用具の選定



- ①すのこ
- ②浴槽台
- ③シャワーチェア

■ 3回目

- ・反復動作練習
- ・リスク確認
- ・訪問介護員との連携



手順書の作成

入るとき



出るとき



結果

- ①自宅での入浴開始（見守りのもと）
- ②FIMの向上
123点へ 概ね自立レベル
- ③近隣の散歩・買い物が習慣化
- ④自信をもって行動できるようになった
- ⑤外出の機会が増えた（電車を使って百貨店へ）

考察

居宅訪問指導 (家屋・動作評価)

利用者の主訴

歩きたい

環境イメージ

潜在的ニーズ把握

個別計画書の見直し

利用者・スタッフとの共通認識

担当者会議・訪問介護員との連携

サービスの統一

モチベーション向上
生活習慣の変化
機能改善

暮らしの活性化

おわりに

- デイケアでの練習だけでは、環境イメージがもてず、入浴実現につながらなかった
- 居宅訪問指導により、ニーズ把握と実践的な練習により、入浴動作の実用性が向上した
- スタッフの思い込みによるプログラム提供ではなく、真のニーズにそった計画見直しが有効だった
- 利用者の願いをかなえる居宅訪問でのリハビリテーションを今後も行いたい

ご清聴ありがとうございました